はじめに

詩人たちのさまざまな死

あたりまえの話だが、生まれてきた以上人間はすべて死ぬ。ギリシア人は神々を「不死なる者ら」（athanatoi）と呼んだのに対して、人間を指すのに「死すべきもの」（brotoi, thnetoi）という語を以てした。人間生まれてくるときはほぼ大差ないものだがその死に方となるとおよそ一様ではない。なにがしかの期間生き、老いて、あるいは老いる前に若くして、病を得て死ぬというのが一般的な死であるが、それ以外にも実にさまざまな死があるものだ。殺人、自殺、刑死、獄死、憤死、狂死、腹上死、ショック死、事故死、災害による不慮の死、遭難死などもあるし、疫病や飢饉による大量死などもあり、古来戦死者となるとその数を知らない。ひとたび世界大戦ともなれば何百万人にも及ぶ兵士が死に、それ以外の死者を含めると、何千万人もの人間がその犠牲になって死ぬのである。

言うまでもなく詩人もまた人間であるから、「死すべきもの」であって、やはり死は免れない。「十番目の詩女神（ムーサ）」と讃えられたサッフォーもまた年老いて死んだのである。「虎は死んで皮を残し、詩人は詩を遺して死ぬ」というわけで、ホラティウスの言う「青銅にもまして堅固な碑を」言語によって打ち建て、不滅の傑作を生んだ詩人は、その肉体は滅びても作品は時代を越えて生き残るのである。ホメロスのように、時にはその作品が三千年近く生きつづけ、

不滅の輝きを放っている例さえもある。詩人という生き物は多くの場合、普通の人間とはどこか異なったところを有しているものだが、古今の詩人（本書で言う詩人とは広義においてであって、歌人、俳人などを含む）の生涯を、その死に視点を据えて眺めると、幸福な死を迎えた人よりも、何らかの意味で尋常ならざる死、不幸な死によって最期を遂げた人々が多いことに、改めて驚かされる。杜甫の詩の一節に「文章（具体的には詩を指して言う）は命の達するを憎む」つまりは「詩は詩人が順境のうちに生きることを憎む」という詩句が見えるが、これは人が詩人として生きること自体が不幸であるということを言っており、当然ながらその死もまた不幸、悲惨なものとならざるを得ない。事実、殺人に始まり、刑死、獄死、自殺、戦死、事故死、奇禍による死、流謫の境涯での死、野垂れ死になど、実にさまざまな形での詩人の死がある。中にはアイスキュロスのように、なんとも奇妙な死に方をしたものだと思わせる話が伝えられている詩人もいる。詩人の常のように思われている夭折などはむしろ幸福な死の部類に入るほどである。若くして詩魂が枯渇し、作品よりも作者のほうが長生きしている元詩人が少なからずいることを思えば、夭折することは、詩人にとってけっして不幸なことではない。「芸術は長く人生は短い」というのは、詩にかんしては実は誤りで、その実「詩は短く人生は長い」のである。肉体は生きていても、詩人としては早く死んでいるのだから、そういう人物は夭折した詩人の中に入れてもいいかもしれないのだ。十代で彗星のごとくフランス詩壇にあらわれ、まばゆい光芒を放った詩を残した後、詩を捨てていさぎよく転身し、その後の人生を武器商人として生きた天才ランボーなどはむしろみごとである。

本書ではとりあげないが、不幸な死を遂げた詩人たちの中には、ヨットで航行中嵐に遭って水死したシェリーや、地震で圧死した藤田東湖、火事で焼死した（みずから火を放ったとも言われている）亀井南冥のような人物もおり、その死の原因や真相が不明な人たちもいる。古代の詩人たちの多くはそうである。ギリシア詩人の場合、その死にかんする伝承や伝説は、遺された作品から類推されて作り上げられたと思われるケースが大半である。

世には「窮死」という死もある。過去の詩人の伝記のたぐいを読むと、「詩人は貧窮のうちに死んだ」というような記述が、いたるところに見出せる。「少達多窮は文士の常」とはさる江戸漢詩人のことばであるが、昔からもの書き、とりわけ詩人は貧乏なものと相場が決まっているからである。「憔悴　四十にならんとするも　肉無くして蚤と

虱を畏る」という生活を強いられた晩唐の詩人李商隠は、わが子に武人として出世する途を歩めと説き聞かせている。いや欧陽脩によれば、詩人が貧乏なのではなく、人は窮迫して初めて詩人と呼べるほどの者になるのである。オウィディウスによれば、法律家になるのをやめて、詩人として立ちたいと父親に告げたとき、父親が反対した理由は、「ホメロスだって財産は遺さなかったではないか」というものであった。そういう次第で、貧乏に苦しみ、窮迫のうちに死んだ詩人はあまりにも多いので、「窮死した詩人たち」という章は立てることをしなかった。そういう章を立てたら、それだけで本書はとんでもない大著になってしまう惧れがあるからだ。

古来詩人と酒は縁が深い。それゆえ「醉死した詩人たち」という章をぜひ立てたかったのだが、残念ながらこれはむずかしいことがわかった。古来酒を愛した詩人は多い。だが意外なことに、「詩酒合一」が詩人たちの理想であった中国においてさえも、「詩酒徒」はあまたいたが、大酒豪飲して酒を飲んでいる最中に醉死したと伝えられる詩人はいないようだ。少なくとも名のある詩人で醉死した人はいない。わが国で言えば、「醉死なんぞ論ぜん、埋もれると埋もれざるとを」と喝破した、江戸の酒徒番付けで大関を張った亀田鵬齋先生でさえも、醉死はしていないのである。わずかに、一生の間飲んで飲んで飲み尽くし、死の床にあってもなお酒杯を離さず、死んだ日にさえも五合の酒を飲んだという若山牧水の死が、醉死に近いと言えよう。（その結果、アルコールが全身に浸みわたっていて、死後三日たっても、遺体は腐敗臭がまったくしなかったという。）ヨーロッパでは、これも酒の詩人として名高いアナクレオンが、葡萄酒の滓に残っていた葡萄の種を喉につまらせて死んだと伝えられているのが、数少ない醉死の例である。

同様に、「腹上死した詩人たち」という章も立ててみたかったのだが、寡聞にしてその例が思い浮かばす、これは断念せざるをえなかった。せめてその生涯で二千五百人の女たちと交わったと豪語しているピエール・ルイスには、腹上死してもらいたかったのだが、こればかりはどうにもならない。

古今の多くの詩人たちが、尋常ならざる死を遂げている事実を前にすると、やはり詩人というものは、ヴェルレーヌの言う「呪われた詩人」であることが運命づけられているのか、と嘆息せざるを得ない。無論、詩人は必ず不幸な存在と決まったものではなく、ピンダロス、白楽天、ゲーテ、ユゴーに見るように、詩人として名声につつまれ、長

寿を保った後に、栄光のうちに安穏にその生涯を終えたり、そこまではゆかずとも、安定した平和な市民的生活を送り、幸福に死んだ詩人たちも古来少なからずいることは確かである。ピンダロス、白楽天、ゲーテ、俊成などがそれで、日夏耿之介、西脇順三郎なども、その部類に入るだろう。

そこで、本書ではやつがれの知る限りでの古今東西の詩人たち百人をとりあげ、その死の諸相を、虚実取りまぜて眺めてみたい。「虚実取りまぜて」というのは、遠い昔の詩人たちの死に関する事実は確かめようがなく、「この詩人の死にかんしては、かような話が伝わっている」ということを述べるしかないからである。それに詩人の死にまつわる伝承が事実そのものではないにしても、当の詩人の死が、古代の人々の間でそうとらえられていたという事実を物語っていることは否めないから、その伝承を伝えるのである。併せて、とりあげた当の詩人とその周辺について、「贅言」として「閑人曰く」という気ままなコメントを付することとした。これは多くは無駄話であり、また放言でもある。言うまでもなく、司馬遷の『史記』にある「太史公曰く」を真似たものである。本書は『史記』ではなく『死記』であるが、そのくらいの冗談は許されるであろう。

本書では古今の詩人百人を選んでとりあげたが、無論これは網羅的なものではない。残念ながら、世界文学、古今東西の詩人たちに関するやつがれの知見は乏しく、選んだ詩人たちには相当偏りがあることは認めねばならない。近・現代の人たちよりも東西の古典から選んだ詩人たちが多いのは、これまで「現代に生きる古代人」を自認しているやつがれの関心が、圧倒的にそこに集中していたからである。イスラム文化圏の文学、叙事詩『王書』の作者フェルドゥスィー、『薔薇園』のサアディー、詩聖ハーフェズのような傑出した詩人を生んだ古典ペルシア文学のみならず、数多くのアラビア語詩人を輩出したイスラム文化圏の文学、『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』のような大叙事詩を生んだサンスクリット文学（インド文学）、アフリカ文学、東南アジアの文学にまでは視野が及ばず、ヨーロッパ文学では英語圏の文学、ドイツ文学には疎いし、北欧、東欧の文学などにはまったく暗いので、多くの重要な詩人たちがもれている可能性が高いが、読者がそれにお気づきになったら、欠けている部分を補いご自分で新たな「詩人往生絵巻」を編んでみることをお勧めしたい。そうすることで、詩人というものに関する新たな発見があるかも知れないからである。